

# カキにおけるチャノキイロアザミウマ被害の多発要因

## ～適期防除に向けて～

カキにおけるチャノキイロアザミウマ被害の多発要因として、年間の発生回数が多いこと、寄生虫数が少なくても被害が出やすいこと、農薬がかからないカキ園周辺部のヒサカキやチャなどで増殖した成虫が繰り返しカキ園に飛び込んでいることなどが考えられます。

### 1. 背景と目的

チャノキイロアザミウマの被害は 2015 年に天理市の渋柿（‘刀根早生’や‘平核無’）園で大発生しました。果実表面に帯状の灰褐色の被害痕が出るので、品質が低下します（図1）。



図1 チャノキイロアザミウマによる果実被害

### 2. 研究成果の概要

本種成虫の動向を調査するために、黄色粘着トラップ（以下、トラップ）を、2016年から天理市や五條市のカキ園や果樹・薬草研究センター内のカキ園、カキ園周辺部の常緑樹（ヒサカキやチャなど）に設置しました（図2）。



図2 トラップ設置状況（カキ園周辺部）

2016年～2019年の調査の結果、地域や園地により本種の密度が大きく異なること、年5回以上は発生ピークがあること、6月下旬以降に虫数が急増すること（図3）、寄生虫数が少なくても被害につながりやすいこと、カキ園周辺部にあるヒサカキやチャで増殖した本種の成虫が繰り返しカキ園に飛び込んで、防除を行っているにもかかわらず被害が発生することなどが明らかとなりました。これらのことから、本種の発生ピークに応じた防除体系の構築が重要であることがわかりました。

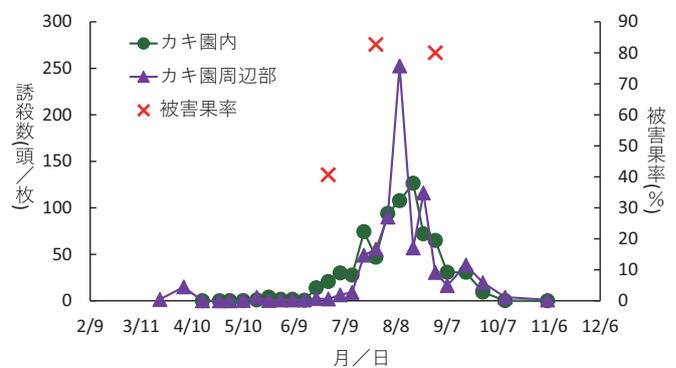


図3 無防除のカキ園とその周辺部におけるトラップへの誘殺虫数と被害果率の推移（2018年）

### 3. 実用化に向けた対応

現在、気温により本種成虫の発生ピークを予測する方法を用いて、発生ピーク前に防除を実施する適期防除について検討しています。

（果樹・薬草研究センター 杉村 輝彦）